

# SHOW YOUR PRIDE!

## LGBTQの皆さんが DSDsを持つ子どもたち・人々・家族のアライになるには 自分と異なる「他者」を尊重する、あなたのプライドを!

「アライ (ALLY)」とは、欧米でLGBT当事者やその運動の「同盟者」を表す用語です。DSDsの場合は「患者会 (サポートグループ)」が中心で、LGBT運動での「アライ」に当たる人は「支援者 (サポーター)」ということになるでしょう。LGBTの皆さんは、DSDsを持つ子どもたち・人々・家族の皆さんの「支援者」になることはできます。「支援者」とは、「DSDsの人がいるから、男女の区別は〜」など「DSDsで何が言えるか?」ではなく、**相手を自分の思いや望みと異なる「他者」として尊重できる人のことです。**

### 皆さんはまず、DSDsを持つ性的マイノリティの人々の支援ができます!

現在は日本でも、性的マイノリティの人々の自助努力により、支援インフラが各地で作られるようになりつつあり、行政の支援も得られつつあります。DSDsについては、社会的な偏見や誤解ゆえに孤立を余儀なくされる、性的マイノリティではない当事者・家族が大多数で、まだ患者会も始まったばかりです。ですがもちろん、DSDsを持つ人々にも、DSDsを持たない人同様に、同じLGBTQ等性的マイノリティの仲間がいます。そのような人々を、是非皆さんの支援の輪にも加えて下さい!

### DSDsについての正確な情報を発信して下さい!

DSDsを持つ当事者・家族の皆さんが孤立を余儀なくされ、自殺未遂率が高い傾向にあるのは、ひとえに社会的偏見や誤解ゆえです。DSDsはいわゆる「性の多様性: Anything Goes!」と言うよりも、様々な疾患・障害、**たとえばHIVに関する情報のように正確な情報が必要とされます。**性的マイノリティの人々が、講演・セミナー・資料などでDSDsを取り上げる際に正確な情報を発信することで、DSDsを持つ子どもたち・人々・家族の皆さんの支援ができます!

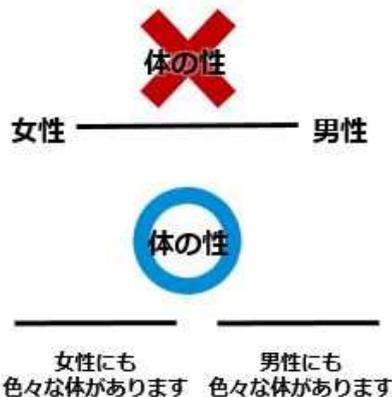
### 講演やパンフレットで次のように触れるだけで支援になります!

いわゆる性分化疾患 (現在では「体の性の様々な発達: DSDsと呼ばれることが多い) には「男女の中間・性別が分けられない人」等の誤解や偏見がありますが、**実際には一つの体の状態ではなく様々なものがあり、「女性にもいろいろな体がある・男性にもいろいろな体がある」ということです。**DSDsを持つ人々は、体の一部が異なるだけのただの女性・男性で、性的指向・性自認の問題はありません。ですがもちろんDSDsを持つ人々の中にも、そうでない人々と同様にLGBTQ等性的マイノリティの人々がいます。私たちは、**DSDsについての正確な情報を広め、DSDsを持ちつつ性的マイノリティの人々を支援します。」**

### 体の性のグラデーションモデルは、DSDsを持つ多くの子どもたち・人々・家族の皆さんに二次的なトラウマを与えてしまいます。

日本では性的マイノリティの皆さんについての説明で、男女をつなげたグラデーションモデルが使われることがあります。DSDsを持つ人々にも「男でも女でもない」と自認する人はいますが、それは「性自認」のレイヤーであり、「体の性」のグラデーションモデルは、体の性に関わる部位 (性器のサイズや尿道口の位置、子宮の有無、性腺の種類、染色体の違い) に悩み、女性・男性としての尊厳を損なわれている多くのDSDsを持つ子どもたち・人々に、**「あなたは100%の女性の体ではない、100%の男性の体ではない」という含意を与えてしまいます。先天的に子宮がない女の子に「だからあなたの体は男と女の間」とは決して言いません。診断だけでトラウマを受けている人も多くいて、このような説明モデルは二次的なトラウマを与えかねません。**さらに、親御さんたちは、各体の状態、子どもの認知・身体発達状況に応じて、**命がけで子どもに話している中、不正確で無理解な横槍を入れることにもなりかねません。**

「性自認」や「性的指向」「性表現」のグラデーションモデルは、LGBTQ等性的マイノリティの人々の説明には最適ですが、「体の性」については男女を分けた図を使っていただくようお願い致します。



DSDsについて更に詳しくは...

DSDを持つ子どもと家族のための情報サイト

**nextsd JAPAN**

nextsd.com/

ネクスDSD





# SHOW YOUR PRIDE!

自分と異なる「他者」を尊重する  
あなたのプライドを!



様々なDSDsを持つ女の子・男の子たちのサマーキャンプの様子



# LGBTQの皆さんが DSDsを持つ子どもたち・人々・家族の アライになるには?

「性分化疾患」「インターセックス」という言葉を聞かれたことはありますか？ 性分化疾患とは「染色体、性腺、もしくは解剖学的に性に関する体の発達が先天的に非定型である状態」を指す医学用語です。

一般的に、性に関する体の発達は胎児期に始まり、思春期・青年期に起こります。特にお母さんのお腹の中で基本的な体の形態が形成されていく胎児期での、性腺や子宮・膣などの内性器の発達や、外性器の発達など、体の性の発達のプロセスはとても複雑なもので、その過程の中で、これが「普通」だと固定観念で決められている男性・女性の体とは少し違った体の発達のプロセスを踏む、男の子・女の子の赤ちゃんもいるのです。

このような、他の人とは少し違った体の性の発達のプロセスをたどった状態には様々なものがあるため、現在では、**Differences of Sex Development : 体の性の様々な発達(DSDs)** と呼ばれることが多くなっています。

DSDsには、性別の判定にしかるべき検査が必要なサイズ・形状の外性器や、内性器が露出した状態で生まれる男の子や女の子、無月経等で、染色体がXYであることが判明する女の子や、膣・子宮が無いと分かる女の子など様々な体の状態があり、また判明時期もそれぞれに異なります。

まだ実情がほとんど分かっていなかった頃、DSDsは、「ハーマフロダイト（両性具有・半陰陽・男でも女でもない性）」と呼ばれていましたが、**現在この表現は不適切とされています。**これはここ15年間で、**DSDsを持つ人々の大多数が、自分をただの男性・女性と見てもらいたがっているという実情が分かってきたからです。**つまり「男でも女でもない・中間・第3の性」「男性女性両方の特徴を持った人」「男女分けられない人」といったステレオタイプなイメージが、むしろ誤解や偏見を与えているのです。

外性器の形状やサイズなど、体の性に関することですので、とても大切にプライベートな事柄なのですが、このような**社会的偏見・ステレオタイプにさらされる恐れから、ご家族やDSDsを持つ人々・子どもたちはこのことを殊更に隠し続けねばならず、また自殺未遂率が非常に高いという調査結果もあります。**

最近では各種メディアなどでDSDsのことが紹介されることも多くなり、LGBT等性的マイノリティの人々の講座などでも、DSDsが取り上げられることがあります。ですが、**その中には従来の社会的偏見・ステレオタイプ、まだほとんど何も分かっていなかった頃の古い誤った知識に基づくものも多く、かえってDSDsを持つ子どもたち・ご家族を無用に傷つける結果にもなっています。**

このパンフレットは、欧米のDSDsサポートグループに情報提供の協力をいただき、ここ15年の知見に基づくDSDsについての正確な情報を提供し、特にLGBT等の性的マイノリティの皆さんが、DSDsを持つ子どもたち・人々・家族の皆さんのアライになるにはどうすればいいか解説します。

# DSDs

Differences of Sex Development

## 体の性の様々な発達

「Sex」とは「体の性の構造」を表す用語で、男性・女性などの「Gender」（性別）を意味するものではありません。

## DSDsには様々な体の状態があります

DSDsには、CAH・尿道下裂・AIS・MGD・ターナー症候群・MRKH・XY染色体バリエーション等、約40~70種類の体の状態があり、生まれつき膣や子宮が無い不妊の女の子や、尿道口の位置がずれた状態で生まれる男の子も含まれる、あくまで「体の性の構造」に関わる問題です。判明時期も出生時、思春期前後、不妊検査後など様々で、それぞれの体の状態によって優先すべき課題も全く異なります。また、性別の判定にしかるべき検査が必要な外性器の状態で生まれる赤ちゃんの場合も、現在では大多数で女の子・男の子の性別の判定が可能で、難しい場合でも、大多数がしかるべき検査の上で判定された性別での女の子・男の子に育っていくことが分かっています。

## ジェンダー（性別）の問題ではありません

DSDsはどうしても性別の問題と結びがちで、また性的指向・性自認（SOGI）の問題と混同されることが非常に多く、むしろそれによって当事者が傷ついている現状があります。体の性の話と、「男・女らしさ」・性的指向・性自認とは別の問題だということを押さえておいて下さい。

**「皆さんがDSDsをジェンダー（性別）の問題にしがります。そういう状況こそが、私たちが問題にしていることなんです」**

（AISDSDSG:アーリーンさん）

## アイデンティティではありません

大部分の当事者は「DSDs」という包括用語で自分を捉えることもなく、「ターナー症候群を持つ女性」「AISを持つ女性」等、アイデンティティではなく、あくまで自分の体の一部の状態に過ぎず、乗り越えていくべきものと考えています。ましてやその人の性別等のアイデンティティではありません。DSDsを「インターセックスという性別」等、ひとつのカテゴリーと捉えないことが重要です。

**「私を定義するものにしたくない！」**

（マギーさん：ターナー症候群）

## 診断によるトラウマ

DSDsの判明・診断や本人への説明の時期は、多感な思春期前後が多く、CAIS等、特にXY染色体でも女の子に生まれ育った女性の多くにとっては、診断はそれだけでトラウマを得る体験になっています。特に「あなたは女でも男でもない」といった誤った説明は性的なトラウマを与えることが多く、説明の仕方など医療機関でも慎重な対応がされています。

**「診断を告げられたこと簡単に言えば、突然炎に包まれて焼死して男女の区別が分からなくなるくらい焼け焦げて、検視官にこれは男性だと言われたみたいなものでした」**

（CAISを持つ女性）

## 「DSDs=男女の間」ではありません

DSDsは時に「中性・第三の性・男女分けられない人」という言い方がされていますが、DSDsを持つ人々は、実際は体の性の構造が一部違うだけの**ただの男性・女性**で、何ら特別な存在ではありません。また、大多数の当事者は、男性と女性の区別について疑問を投げかける必要性を感じていません。

**「ただ、いろいろな体の男性がいる、いろいろな体の女性がいるということに過ぎません」**

（AIS-DSDSG:アーリーンさん）

## 体の一部の違いで、女性・男性としての尊厳を傷つけられている人々です

外性器のサイズや形状の違い、不妊の事実、子宮や膣の欠損など、DSDsを持つ女性・男性の多くは、自分の女性・男性としての尊厳を損なわれています。特に、大切な人との恋愛関係では大きな葛藤を抱くこととなります。

**「君は女性の基準に一致していない。君は子宮も完全な膣もない。それは女性とはこうあるはずだ・こうあるべきだという一般的な見解から大きく異なっている。そして君はその基準から外れている」。それが男性の世界、一般的な人たちの考えよね…」**

（MRKHを持つ女性）

## 不妊に苦しむ女性・男性です

DSDsの多くは不妊の状態、自分の生物学的なつながりのある赤ちゃんを授けられないことに、当事者の女性・男性の多くは大きなショックを受けます。当事者の切なる希望から、近年では医療の進歩により、例えば子宮のない女性への子宮移植などで、赤ちゃんを授けられるケースが増えています。

**「テレビで赤ちゃんのおむつのCMを見るたびに泣いていました。赤ちゃんを産みたいという私の夢は打ち砕かれました」**

（アビィさん：スワイヤー症候群）

# DSDsを持つ子どもたち・人々に対する誤解・偏見を生み出す「体の性の構造」に対する古い固定観念（生物学的社会規範）とは？

「インターセックス」と言われると、どうしても「男でも女でもない」というイメージを思い起こしがちですが、実際のDSDを持つ人々は、女性・男性の「体の性の構造」に対する古い固定観念（生物学的社会規範）、つまり例えば女性なら、「染色体はXXでなければならない。子宮と膣は絶対必要で、子どもを産めなくてはならない。エストロゲンは0.6pg/ml以上。テストステロンは一般男性の10%以下。性腺は卵巣として機能してはならない。クリトリスは2.5cm以下でなくてはならない」という規範・基準とは、それぞれ一部だけ異なる体の状態をもった人に過ぎません。

私たちは例えば、背の高い女性を「半分男」とは言いませんし、優しい男性を「男でも女でもない」とは言いません。当然それは相手の心を傷つけるからです。ましてや、不妊に悩み苦しむ女性・男性に対して、「だからあなたは男でも女でもない」とは決して言うてはいけません。そしてこれはDSDを持つ人々に対しても同じです。私たちはいつの間にか、先に挙げたような狭量で強迫的な固定観念を基準にして、その基準に全て合致しないと、その人のことを「男でも女でもない」としてきているわけです。

事実、DSDを持つ人々の大多数は、「性自認」の問題でさえなく、自分をただの男性・ただの女性と認識しています。（外性器の形状や不妊に苦しむ女性に、「あなたが自分を女性だと思っているから女性として認めます」などとは普通言いません）。もちろん、DSDsがあるかないかに関係なく、自身を「男でも女でもない」と自認する人もいらっしゃいますが、だからと言って「DSDを持つ人＝男でも女でもない」とするのは、ただの男性・女性で、自身の外性器の形状に悩み、不妊に苦しみ、診断にトラウマを受け、女性・男性としての尊厳を損なわれ、中には命の危険性もある多くの当事者に、二次的なトラウマを与えてしまっています。

DSDsは一つのカテゴリーに収まらない、それぞれの体の状態によって、併発する疾患や不妊の問題など、様々にセンシティブな課題があります。外性器・外陰部など何よりも女性・男性にとって大切なプライベートゾーンに関わる話です。自分の外性器の形を取り上げられたいと思う人はほとんどいません。人間を尊重する重大な配慮が必要でしょう。

## LGBTQ等性的マイノリティの人々との関係は？

実は、DSDsを持つ子どもたち・人々の皆さんの大多数は、自分自身をLGBTQ等性的マイノリティの一員とは考えていません。

つまり、DSDsは性的マイノリティの人々の一員ではなく、障害を持つ人々や在日外国人の人々にも性的マイノリティの人々がいるのと同じように、DSDsを持つ人々にも性的マイノリティの人々がいるというのが実際の状況です。

当然DSDsを持つ人々にもLGBTQ等性的マイノリティの人々はいて、欧米の患者会でも、人種・肌の色等の重要な多様性のひとつとして尊重されています。決して排除されてません。

ですが、メディアなどに登場するDSDsを持つ人々は、「男でも女でもない」と自認する人やLGBTQ等性的マイノリティの人々に自然に限られてしまい、メディアのセンセーショナリズムも相まって、更にステレオタイプなイメージを広めてしまっている状況があります。

DSDsを持つ当事者の皆さんの想いを無視して、LGBTQ等性的マイノリティのグループに加える事は、例えば国と国との関係で考えるといいでしょう。それぞれの国には「主権」というものがあり、他国の都合で勝手に組み入れることはできないのです。

欧米のDSDsを持つLGBTQ等性的マイノリティの活動家の皆さんも、こういう状況をかんがみ、「当事者の大多数は男性・女性で、性的マイノリティの人もいる。それでOKだ」とアピールされています。ですがまだ日本では、自殺念慮も促しかねない偏見・誤解の中で、多くの当事者・家族の皆さんが孤立したままの状況になってしまっています。

## DSDsを知るための重要な数字

# 0.5%

様々なDSDsすべてを換算すれば、全人口中0.5%の人が何らかのDSDsを持っています。

# 0.02%

DSDsの中でも、性別の判定にしかるべき検査が必要な外性器の状態で生まれる新生児は、5500人に1人（約0.02%）。その中でも最も多いのは先天性副腎皮質過形成（CAH）の女の子で早急に治療を始めないと死に至ります。次に多いのは、尿道口の位置がずれた状態で生まれる尿道下裂の女の子です。

# 2%

DSDsの中でも性別同一性の問題を持つ蓋然性が高いと考えられた体の状態を持つ人の中で、自身を「男でも女でもない」とする人は、約2%です。

# 2%

体の状態によって異なりますが、DSDsの中でも性別同一性の問題を持つ蓋然性が高いと考えられた体の状態を持つ人の中で、性別変更をする人は約2%です。

# 62%

# 23%

DSDsのひとつであるCAIS女性の告知後の自殺念慮率は62%。実際に自殺行動に出た女性は23%もいて、非常に高い率になっています



## オランダ社会文化計画局報告書（2014）

- 当事者のほとんどが、自分たちはLGBT等性的マイノリティの人々とは完全に異なる集団であるのに、混同されることが多いため、彼らとは距離をとることを望んでいる。
- 世間から性的指向・性自認（SOGI）という問題として見られることを恐れている。
- 性自認が曖昧な人（ジェンダーキアの人）は、LGBT等性的マイノリティの人々との繋がりをいくらかは感じているが、こういう人の数は限られている。
- 大多数の当事者は、男性と女性の区別について疑問を投げかける必要性を感じていない。

